

や畏友隆寛と共に載せられているこの善信法師を親鸞と見ても別段支障はなさそう、宛かもそれが聖人滅後五十年に相當する所に、寧ろ何か特に縁由がありそうで、さすが代々漢詩文と共に和歌をも好んだ日野家に生れ、七歳の冬から『萬葉集』を讀み『古今集』を暗んじたと傳え、殊に『詞花集』『千載集』の作者として聞えた伯父範綱卿に育てられ、歌聖慈鎮和尚の嘗つての門弟として『防海每認』に記す、定家が歌道の嫉妬から元久三年親鸞時に册して攝政良經九條兼實の次子房の親、慈鎮の甥を天井に伏して刺殺せしめたとあるのは到底信じられないが、その歌詞も頗る優れている。

尤も、これは單なる贈答歌であるが、驕つて親鸞の和歌として傳える物の中、概して畫讀など釋教的な詠ほど調子が低く平板で、四辻や鳥邊山の歌を初め柿崎や小島の狂歌など、寧ろ輕快な作の方が或は眞作の様に思え、晩年の作らしい物の無い所などから看ても、尠くとも一部蓮如も認めていた如く、歸洛頃までの時期に於いては、感興が湧けば時に若少期の素養がおのずから和歌となつて迸り出たものではあるまいか。晩年期歸洛後やや日數を經、法然門下の人々までが過去の夢を慕う南都北嶺の僧徒の跡を追い、競うて朝紳に交わり和歌に熱狂する淺聞しさを見て、己が領解を幾多の著述に自らの法悦を庶民的な今様振りの和讀に全托するに至るまでは。(なお普通社『しんらん全集』卷十所載の拙稿「日本文學史上に於ける親鸞」參照いただければ幸甚)

## 善光寺如來和讚

森 西洲

善光寺如來和讚には「善光寺ノ如來ノ、ナニハノウラニキタリマス。疫癘アルヒハコノユヘト、守屋ガタグヒハミナトモニ、ホトフリケトゾマフシケル、ヤスクス、メンタメニトテ、ホトケト守屋ガマフスユヘ、トキノ外道ミナトモニ、如來ヲホトケトサダメタリ」とある。此の理由であらう、祖師の著書中にはホトケの語が全くない。阪東本に「佛」にホトケと假名付けたのが一箇所あるが、一見して後人の筆である。御草稿和讚に同様の所が二箇所あるが、之も恐らく後人の筆であらう。御左訓にはホトケの語が多い。之は果して祖師の筆であらうか。大いに疑問である。

玄智の考信録には、眞宗法要撰集の際、僧樸は、左訓のホトケの語を後人の加筆として削除しようとする主張したが、泰嚴が、蓮師にホトケの語が多いという理由で、之に反對し、遂に削除しなかつたといつている。僧鐸の悲歎讚略註には「今家御文章ノ中ニ阿彌陀ホトケトノタマエルコト多シ。コレ祖訓ニ戻ルトヤセン。答テ云ク、タヤ御文章ノミナラズ、圓光大師ノ御法語ニモ數多コレアリ、タヤコレ方俗ニシタガイテ、ヤスクキコエシメン爲」とある。之は苦しい辯解である。「方俗ニシタガイ」たる蓮師を立てれば、方俗に従われなかつた祖師を貶することとなり、「祖訓ニ戻ル」ことなからんとすれば蓮師を貶することとなる。こんなわけで此の問題に深入することは、僧樸泰嚴

の論争以後、禁物のようになつてしまつたのではなからうか。深剛の冠註御草稿和讃には、龍樹讃の註に「再治本、ホトケノ言ナシ。コレ守屋ノ名ケタルユヘニ用イタマワヌカ。余ノ和語ノ聖教中ニモ、ホトケノ語ナシ」とあるが、善光寺如来和讃の所では、スラリと通り過ぎてゐる。

ホトケの語源については、この外に「浮圖説」及び「ほどける(解脱)説」がある。後者は取るに足らぬ俗説である。然し前者は最も有力な説であると私は思う。けれども「ほどをりけ説」も大いに研究に價する説であらう。いずれにしても、既に祖師が、こういう説を立てて、佛教徒がこの語を用いることを悲歎せられ、御自身では全くこの語を避けられた以上、我々眞宗學徒としては、この問題を等閑にしておくことはできぬ。勿論、これには祖師と蓮師の見解の相違があつて、この點は面倒である。然しそんなことに遠慮をして學的研究を躊躇するのは全く眞宗的でなからう。又、研究の結果は、浮圖説が成り立つて、祖師説が成立たぬことになるかも知れぬ。然しその危険の爲に若し我々が此の問題を知らぬ顔で通り過ぎようとするならば亦、眞宗的でない。少くとも師祖にこういう説があつたということは眞宗教徒の皆が心得ていて然るべきであらう。けれども祖師が斯くまでに悲歎して嫌われた語であることを思えば、祖師の著書の現代語譯などには避けた方が祖師に對する禮であらう。たとい奈良平安の文學書や佛書に多くその用例があるにしても。